



富山市教育センターだより

第24号

平成25年3月15日

富山市八人町5-17
TEL 076-431-4404
<http://www.tym.ed.jp/c10>

- 平成25年度市教委主催研修会等一覧
- 新着DVDの紹介
- 学力向上委託事業
- 新任教職員紹介（第3回）
- 学校・園紹介

（題字「道」明瀬 正則）

出会いを大切に ～運命を変えたバルコム監督との出会い～

富山市教育センター所長 岡島 俊樹

私事だが、高校卒業後の1972年、4月読売サッカークラブに入社。希望に胸膨らませ、サッカー選手としての生活がスタートした。

読売サッカークラブは、1969年、当時読売新聞社社長で読売ジャイアンツの生みの親でもある正力松太郎氏の、「野球の次に人気が出るスポーツはサッカーである」という考えから、読売新聞、よみうりランド、日本テレビの3社のバックアップによって運営するクラブとして立ち上げたものである。

私が高校3年生の時、就職は大変厳しい状況であり、なかなか就職を決められないでいた。そんなとき、日本サッカーリーグ2部の「読売サッカークラブ」から誘いがあり、練習に参加した。後日、自宅に「読売サッカークラブ事務局員として採用する」という採用通知が送られてきた。クラブに入ってから大変だろうという気持ちはあったが、やれるだけのことをやってみようと思いながら東京に向かった。みんなと一緒に練習すると、覚悟はしていたが、やはりみんなうまかった。しかし、私は身長181cmと高かったため、ヘディングはチームのトップレベルだった。また、左足のキックもトップの威力があった。このヘディングと左足のキックに磨きをかけようと考え、練習に取り組んだ。午前中に決められた仕事はなく、自由に過ごしていた。アルバイトをする人もいた。

ある日、監督のファン・バルコム氏が、若い選手を集めて「君たちは、今、サッカーをして給料をもらっているが、将来を考えると午前中の空いている時間を将来役に立つことに使いなさい。クラブとして協力できることはするから。」と約束をしてくれた。私は、富山に帰って生活したい、サッカーと関われる仕事をと考

えたときに、教員になることが一番に頭に浮かんだ。そのために大学に進学したいと思い、行動した。合格し、いざ大学に通い出すと、午後2時からの練習に間に合わない現実があった。

監督と相談して、練習は大学から帰って午後6時から一人でやることにした。チームスポーツにおいて、みんなと一緒に練習できないことは、レギュラーを目指すものにとっては、かなり大きなマイナスであった。みんなと一緒に練習できるのは、日曜日や祝祭日に限られていた。そんな状態でもバルコム監督は、私を試合の先発で使ってくれた。そこで、練習に毎日出ている選手で試合に出られない選手がどう思うか考えた。練習に出ていなくても、自分が試合に出るのは当然だと思わせるような結果を残すしかないと考えた。加えて、私を試合で使ってくれる監督の選手起用は間違っていないことの証明にもなると思った。私を起用し、試合に使ってくれている監督のためにも結果を残すことを常に考えながら、一人での練習に取り組んだ。一人での練習でくじけそうになったとき、自分で選んだことなのでしなくてはならないと思うと、がんばることができた。試合の翌日は、体中が筋肉痛で辛かったが、授業に出席した。そして一人での練習にも取り組んだ。休みたくても自分で選んだことなので休むわけにはいかなかった。その結果、リーグ戦が終わってみると、18試合出場で21得点で2部リーグの得点王になっていた。日本サッカーリーグ2部の選手生活と大学生活の両立は、大変厳しいものであった。

今、振り返ってみると、バルコム監督との出会いは、私にとって運命を変える出会いであった。バルコム監督と出会ったから教員岡島俊樹が誕生した。運命が変わった出会いであった。